

恋するフェロモン

目次

恋するフェロモン

5

番外編 踏み出す一歩

277

恋するフェロモン

保存ボタンを押してパソコンの画面を閉じると、新藤香乃は机の上に置いてある小さな時計を見た。

タイミング良く、終業時刻を知らせる『夕焼け小焼け』の音楽が流れ始める。

この会社に入って初めてこの音楽を聞いたときはびっくりした。

いきなり流れ始めた音楽にきよろきよろした香乃に、長く勤めている四十代のパートの女性が笑いながら教えてくれた。「うちの会社はこの音楽が鳴ったら仕事はおしまい。できるだけ残業しないように、終業時刻を知らせてくれるの」と。

最初はこの時間までに仕事を終わらせることも、音楽が鳴ると同時に退出することもできなかったけれど、一年半も勤めれば慣れてくる。

今では音楽が流れる直前に、仕事を終えることができるようになった。

「香乃ちゃん！ 香乃ちゃんって、香水とか興味ある？」

すでに帰る準備万端の状態で、パートの女性である智子が話しかけてきた。中学生の子もがい

るとは思えない、若々しくて元気な女性だ。

「えー？ なになに、香水？」

香乃より先に興味を示したのは、智子と同年代で小学生の子どもを持つ朝美だ。しっとりとした雰囲気でおっとりして見えるのに、テキパキ仕事をこなすしつかり者だ。

「ふふ、そうなのよー。この間の誕生日に旦那がプレゼントを買ってくれたんだけどね、そのときお店の人が試供品をくれたの」

仲の良い四十代主婦二人組は、香乃の返事を待たずに会話を繰り広げる。

「わあっ、これって高級ブランドの香水じゃない！」

「そうなの。でも、私はつけないし、かといって処分するのはもったいないでしょ？ よかったら香乃ちゃん、使って」

香乃は手渡されたオレンジ色のパッケージをあけて、小さな瓶を取り出した。試供品の割には、小瓶にもブランドロゴが入っていて、部屋に飾るだけでもかわいらしいだろう。蓋をあけると、上品な、淡い花のような香りが鼻腔をついた。

とても素敵ないい香りだと思うのに、香乃は小さくむせてしまう。

「ありがとうございます。でも、すみません。実は私、香りの強いものが得意じゃなくて……。だからこれは別の方へあげてください」

「あら、香乃ちゃん香水苦手なの？」

香乃に返されたパッケージを手にして残念そうに智子が言った。

「今時の若い子って、こういうのつけるのが当たり前かと思っていた」

智子の隣で朝美が思わずといったように呟く。

「そう、じゃあ、朝美はどう？」

智子は今度、朝美に提案したけれど彼女は軽く首を左右に振る。

「私がこんなのつけたら、旦那がびっくりするわよ。今度誰か若い子が挨拶^{あいさつ}にきたときにでもあげたら？」

「そうね」

この会社では二十五歳である香乃が一番若く、他は年配の男性社員かパートの主婦ばかりだ。だからみんな香乃のことを年の離れた妹か娘のように扱ってくれている。

香乃が断つても特に気にすることなく、二人は「じゃあお先に失礼するわねー、お疲れ様」と言って帰っていった。

「お疲れ様です」

香乃も頭を下げて二人を見送る。

香乃が勤めているのは、古びた賃貸ビルにひっそりとオフィスを構えている小さな会社だ。

クライアントから依頼された書類やアンケートの調査結果など、様々なデータ入力作業がメインの仕事で、学歴も特別なスキルも必要ない。

パソコンさえ扱えれば、誰にでもできるような地味で地道な仕事だ。残業もゼロとはいわないが許容範囲内。

その分、給料はあまり高くない。けれど人間関係は恵まれている。

長く勤めている社員ばかりで、みんな家族のように仲がいい。

以前勤めていた大手企業の間関係に疲れ切っていた香乃にとつて、給料以上の魅力がここにはあった。小さな会社での穏やかな日々が、今の香乃には貴重だった。

水曜曰。

今日は大学時代の親友二人との女子会の日だ。サークル活動を通して知り合った彼女たちとは妙に気が合って、学生の頃は毎日のように一緒に過ごした。何でも話せて、楽しいこともつらいことも分かち合ってきた、そんな間柄だ。就職してからは会う機会が減ったけれど、せめて二ヶ月に一度は一緒に遊ぼうと女子会をしている。

居酒屋で気楽に飲むこともあれば、贅沢^{ぜいたか}してホテルのエステに行くこともある。他にも、金融セミナーに参加したり、マナースクールの講座を受講したりすることもある。

今夜はアンダー三十限定のワイン会に行くことになっていた。

こういう機会でもなければ、敷居が高く足を踏み入れない人気のフレンチレストランが会場だ。大手企業に勤める二人より早めに仕事の終わる香乃は、着替えるために一度自分の家に戻った。

香乃にとって、おしゃれの優先順位は低い。

通勤服は、紺やベージュなどのベーシックな色のスカートに、シンプルなカットソーやブラウスというおとなしめのスタイルだし、胸の下まで伸びた髪も普段はひとつに結んでいる。

おしゃれをして出かける機会などほとんどない。

けれど大学時代の友人たちと遊ぶときは別だ。

軽くシャワーを浴びて、いつもよりほんの少し手の込んだメイクをする。髪を下ろしてハーフアップにすると、軽いくせ毛がいい感じにふんわり広がった。

飾りボタンのたくさんついた濃いグリーンのワンピースは浅めのVネックで、鎖骨が綺麗に見える。そこに小さめの一粒ダイヤのペンダントを合わせた。今日の会場がフレンチレストランということもあり、派手ではないけれど、上品で落ち着いた装いを目指す。

これで、先日智子がくれようとした試供品の香水をつけたら、もう少し大人っぽい雰囲気になったかもしれないが……

「でも、やっぱり苦手なんだよねえ」

名前に『香』という漢字が使われているものの、香乃は『香り』が苦手だ。

それに気づいたのは、高校時代。背伸びして、それこそ試供品の香水を手首につけたことがあった。立ち上る香りはさわやかで友人たちにも好評だったが、だんだんその香りが鼻について落ち着かなくなった。しまいには気分まで悪くなってしまったのだ。

一時期、香りの広がる柔軟剤が流行ったときなどは、通勤電車で女性のそばにるのが苦痛だった。そんな風に、香りの強いものを身につけなくなってから、ますます苦手意識は強くなっている。鏡を見ながらぼんやりと考え事していた香乃は、ふと部屋の時計を目にして慌てた。「いけない！ 余裕あると思っていたのに、もうこんな時間だ！」

香乃は小ぶりのバッグを持って、急いで部屋を飛び出したのだった。

それ以降、化粧品をはじめ、シャンプーやボディソープといったものも無香料か、香りの極力弱いものを選んでいく。柔軟剤は使わないし、部屋でアロマも焚かない。もちろん香水も買ったことはない。

「いけない！ 余裕あると思っていたのに、もうこんな時間だ！」

香乃は小ぶりのバッグを持って、急いで部屋を飛び出したのだった。

そんな風に、香りの強いものを身につけなくなってから、ますます苦手意識は強くなっている。鏡を見ながらぼんやりと考え事をしていた香乃は、ふと部屋の時計を目にして慌てた。

「いけない！ 余裕あると思っていたのに、もうこんな時間だ！」

香乃は小ぶりのバッグを持って、急いで部屋を飛び出したのだった。

ワイン会の開始は十九時半からだ。それまでに現地集合することになっていた。今の香乃にとって、友人たちと数ヶ月に一度のこういったイベントが自分へのちょっとした褒め美になっている。

彼女たちは転職して給料の下がった香乃の懐具合を心配して、あまり贅沢な遊び方はやめようと提案してくれた。

その心遣いをありがたいと思いつつも、これまでどおりにしてほしいとお願ひしたのは香乃だ。彼女たちと一緒にでなければこんな風に贅沢を楽しむ機会はなくなってしまっからと。

それを楽しみに、仕事を頑張ることができると言ったら、彼女たちは笑顔で頷いてくれた。香乃は駅を出ると、急いで目的のレストランへ向かう。

しかし、スマホで場所を確認していたにもかかわらず、思っていたところと違う道を歩いていたようだ。目的地の一向に辿り着かない。

駅からそう遠くないはずなのに、と時間を気にしながらうろろうろして一本横道にそれると、着飾った女性たちが目に入る。

彼女たちの華やかな格好にもしかしてと思い、そのあとを追う。そうして香乃は、ようやく目的の店を見つけた。

壁面の小さなランプが照らすお店の看板を確認して、ほっと胸を撫で下ろした。迷ったせいですでに開始時間ギリギリだ。

友人たちからはそれぞれ『受付を済ませて店内にいるね』とメールが届いている。

看板の隣に地下へ続く階段があつて、香乃は薄暗く少し急になっているそこへと足を踏み出した。慌てていたせいや、ヒールの高さがいつもと違ったせいで、香乃の体はがくんと傾く。

咄嗟に手すりへ手を伸ばすのと、香乃の背後から腕が回るのは同時だった。

「——!!」

「大丈夫ですか？」

耳元でやわらかく響いたのは、低めの艶やかな男性の声。

香乃は男性の声がこれほど甘く響くのを初めて聞いた。

一瞬、体に回った腕にきゅっと力が込められる。

けれど、彼の腕は香乃の両足がきちんと階段を踏みしめるのを確認して、そっと離れた。

「す、すみませんっ！」

「この階段は急だから、慌てて下りると危ないよ」

香乃は振り返って、助けてくれた男性を見る。

直後、自分の心臓がどくんと音を立てるのを聞いた。

やわらかい口調でそう言った彼は、非常に整った容姿をしていた。

わずかに明るい髪はゆるやかにくせがあつて、微笑んだ口元には甘さが浮かぶ。ほへつと間拔けな表情で固まった香乃は、慌ててお礼を言つて彼から離れた。

香乃の日常ではなかなか拝めないイケメンとの急接近に、心臓がばくばくしている。

「ゆっくり気をつけて下りて」

「はい」

香乃は、今度はヒールに気をつけながら慎重に一段一段階段を下りていく。その間ずっと、背中に彼の見守るような気配があつた。

彼も今夜のワイン会の参加者だろうか。香乃のペースに合わせて後ろから階段を下りてくる。

そして階段を下りきると、背後から彼の腕が伸びてきて香乃より先に店のドアを開けてくれた。

さりげなく女性扱いをされて、くすぐったい気持ちになる。

「あ、ありがとうございます」

「どういたしまして」

近い距離でにっこりと微笑まれて、香乃は恥ずかしくなつてうつむいた。

この人は自分の笑顔の魅力をわかっているのだろうか？

こんなに優しく甘く微笑まれたら、妙な期待を抱く女性が出てきそうだと思う。

気づけば、自然とエスコートされて、香乃は彼とともにワイン会の受付を済ませることになった。

今夜のワイン会への参加申し込みをしてくれたのは、大学時代の友人である美咲だ。

今夜の彼女は、栗色の髪をアップにして、大きなフープのピアスをつけていた。体の線に沿った華やかなプリント生地まじのドレスは、彼女のスタイルの良さを際立たせている。

同い年とは思えないほど色っぽい。

流行に敏感で好奇心旺盛おうちな彼女は、いつもいろんなことに興味を持つては香乃たちを誘つてくれる。ワイン好きの恋人と付き合い始めてからは、彼女もワインにはまったようでソムリエスクールに通っているそうだ。

もう一人の友人は、落ち着いていてしつかりしている千鶴ちづる。真つ黒なストレートの髪は艶やかで、背中にさらりと下ろしているだけで妙におしゃれに見える。彼女はふんわりとしたシフォンブラウ

スにタイトなレースのスカートの綺麗めスタイルだった。

色っぽい美咲に綺麗系の千鶴、そして平凡な香乃。

大学時代から「タイプの違う三人だね」とよく言われたが、違うからこそ面白くて、一緒に居るのが楽しかった。何にでも興味を持つ美咲に引きずられ、しつかり者の千鶴に見守られる。二人からは「香乃は私たちの癒いよし！」といつも抱きつかれていた。

目立つ容姿の彼女たちと地味な自分の組み合わせに、二人の引き立て役みたいだと言われたことも一度や二度ではない。でも自分の存在で彼女たちが引き立つなら、むしろ香乃は嬉しかった。

香乃が来るのが遅かったのでやきもきしていたのだろう。椅子から立つて手招きしてくれている彼女たちのところに、香乃は小走りで近づいた。

「香乃、遅い」

美咲が唇を尖らせて言いながらも、ほっとしたように微笑む。

「ごめん、迷っちゃって」

「駅で待ち合わせすればよかったわね」

千鶴は、空いていた隣の席を示してくれた。

ほんの少し会わなかっただけに、彼女たちはどんどん綺麗になっていく気がする。

ワイン会という場所柄、華やかなスタイルなのは当然だけれど、それにも増して輝いて見えるのは女性としての自信のなせるもののだろうか。

同じテーブルには見知らぬ二人の男性が座っていた。今夜は、恋人と別れたばかりの千鶴を慰めるために、男性たちと相席にしたと美咲からは聞いている。

香乃は緊張しながら、軽く頭を下げて千鶴の隣に座った。

けれど、空いていた残りの一席に座った人物に思わず息を呑んだ。

「一緒のテーブルだったんだ」

そう言っただけで微笑んだのは、受付で別れたばかりの男性だ。

「何？ 響也、早速知り合っているの？」

「ついさっきね」

「あの、階段を踏み外しかけたのを助けてもらって……」

美咲たちの好奇心いっぱいの視線に香乃は慌てて言い訳する。

彼は「笹井響也です」と名乗ると、すぐに香乃に名刺を差し出してきた。目の前に出されては、

受け取らないわけにもいかず、香乃はおずおずとそれを手に取る。そこには、名の知れた外資系商

社の社名が記載されていて、驚いた香乃は思わず相手の顔を見返してしまった。

その横で、二人の男性が目丸くして咳く。

「響也……珍しい」

「ああ。こいつが自分から名刺を渡すの初めて見た」

響也につられて、他の二人も名刺を差し出してくる。

会社の同期なのだと言明してくれたのは、紺野弘人。ワインよりも焼酎が似合いそうなスポーツマンタイプの彼は美咲と同じソムリエスクールに通っているのだそうだ。今回はその関係で相席になったらしい。

短い髪もがっしりした体格も野性的な雰囲気なのに、気さくにこここ笑っている。

ワイン初心者だと言っただけで挨拶したのは羽島裕貴だ。メガネをかけていて一見クールに感じるが、表情がやわらかいせいか優しく穏やかな印象を受ける。

そして先ほど香乃を助けてくれた笹井響也。

整った顔立ちにスマートな身のこなし、そして紳士的な対応はまったく隙がなさそうに見えた。けれど彼が笑みを浮かべると一気にその雰囲気が変わる。

三人ともタイプは違うがそれぞれ素敵な男性だった。

当然のように、他のテーブルにいる女性たちの視線が、彼らに集まっている。

ワイン会と銘打っているが、アンダー三十限定の意味を深読みすれば、一種の婚活か合コンのようなものだ。それを思うと、彼らに注目が集まるのは当然だろう。

「名前教えてくれる？」

響也に聞かれて、香乃は戸惑いながらも「新藤香乃です」と答えた。

「香乃ちゃん……かわいい名前だね。香乃ちゃんって呼んでいい？」

わずかに首を傾け綺麗な笑みを浮かべて聞いてくる。こんな風に聞かれれば、誰だって反射的に

頷いてしまいうさだ。

香乃も反応しそうになりながらも、曖昧に微笑んで答えを濁した。彼とは出会ってまだ二十分と経っていない。

何より美咲や千鶴と一緒にいるのに、真つ先に香乃に声をかけてきた男性は初めてだった。彼への対応に戸惑っているうちに、ざわついていた会場内がしんと静まり返る。そして、スポットライトに照らされたワイン会の主催者が挨拶を述べ始めた。

香乃はほっとしてそちらに視線を向け、今夜のワインの銘柄や料理の説明を聞くことに集中する。最初にグラスに注がれたシャンパンは、すっきりとした酸味を感じさせるものだった。

続いて出された小さなアミューズは、グレープフルーツとクリームチーズをシュー生地で包んだもので、シャンパンともすぐく合っているのだろう。

だが、シャンパンも料理もとてもおいしいはずなのに、香乃には味がちつともわからない。

なぜなら、主催者の挨拶が終わっても、こうして食事が始まって、響也の視線がずっと香乃に向いているからだ。

友人と三人でいるとき、いつもなら男性の視線は美咲や千鶴に向かう。それに慣れていた香乃にとって、こんなにあからさまに見つめられるのは初めての経験だった。

響也の視線が熱くて、香乃の頭はだんだんぼんやりしてくる。何を食べて飲んでいるのかも曖昧にぼやけて、マナースクールで学んだカトラリーの使い方にも自信がなくなってくる。

「響也、おまえ、あからさまに見すぎ」

弘人が苦笑しながら響也の肘を突いた。

「いや、だって香乃ちゃんがかわいいから、つい目がいくんだよ」

そのセリフにドキッとして香乃は固まった。

見るからに素敵な男性に甘い声で「かわいい」なんて言われると恥ずかしくてたまらない。香乃はかあつとなつてうつつむいた。

本当なら嬉しいはずの言葉。けれど香乃の心にはもやもやしたものが入り込んでいく。

香乃はカトラリーをお皿に置くと、水のグラスに口をつけて気持ちを落ち着かせようとした。

こんなのはただの社交辞令にすぎない。「かわいい」なんて、何にでも使える都合のいい言葉だ。出会ったばかりの女性をじつと見つめて、親しげに名前を呼んで「かわいい」なんて簡単に口にする男性には気をつけたほうがいい。

「香乃に目をつけるなんて、笹井さん見る目があるんですね」

「でも香乃が困っているのほどほどにしてくださいね」

美咲と千鶴が面白そうに、けれど窘めるように言った。その目は響也を警戒して、訝しげに細められている。

彼女たちに笑顔のままでも睨まれたせいか、響也は苦笑して軽く頭を下げた。

「不快な気分らせて、ごめんね」

「いえ……」

響也は名残惜しそうに香乃から視線を外すと、男性陣と会話を始めた。

ほっとした香乃は美咲たちに「ありがとう」と気持ちを入れて目配せする。

ちょうど新たに白ワインがグラスに注がれたことで、美咲がソムリエスクールで学んだことを得意げにレクチャーしてくれた。

香乃は白ワインを飲みながら美咲の話に耳を傾ける。

白ワインはシャルドネのさっぱりした風味。ビンテージが若いけれど、飲みやすい。

お料理は真鯛とオクラの入った赤パプリカのガスパチョ。トマトで作ることの多いガスパチョを赤パプリカで作ったところが面白かった。

「ワインを合わせるとまたいい感じね」

美咲が嬉しそうに言う。

千鶴は「本当？」という表情をしつつ、料理を一口食べたあと美咲を真似てワインを飲んでいた。

そのうち男性たちが、自然な形で香乃たちの会話に入ってくる。彼らは話題が豊富で、仕事の話もわかりやすく説明してくれた。

さらに会話は、途切れることなく気楽な話題へと移っていく。

最近観たミュージカルについて語った千鶴は、演出家が代わって、また面白くなったのよと教えてくれた。

気づけば香乃も、運動不足解消に始めたヨガを今も頑張っていて話していた。ヨガのポーズの話になったとき、ポーズひとつひとつに名前があって、意味があると話すと、男性陣から興味深げにいろいろ聞かれた。

いつもと変わらない、大学時代からの親しい女友達との語らい。

そこに初めて出会った男性たちが加わり、その空気を壊さずに話を盛り上げてくれる。

響也も、最初の強引さが嘘だったかのように会話を楽しんでいた。

けれど香乃のグラスの水が減っているのに気づくと、すぐに店のスタッフに頼んでくれる。

新しいワインが注がれたときは、さらりとワインについて教えてくれた。

そしてたまに目が合うと、にっこりと綺麗な笑顔を見せてくれるのだ。

おいしいワインを飲んで、手の込んだ美しい料理を食べて、親しい友人たちとの会話を楽しむ心地いい時間を過ごしながら、さりげなく絡み合う視線が放つ熱に、香乃は知らず翻弄された。助けられた階段で彼の声を聞いたときからずっと、香乃の心臓はいつもより速く動いている。

空調は心地いい温度のはずなのに脇に汗が滲む。

香乃はそっと友人たちと話している響也を盗み見た。

見るからに極上の、女に不自由しないタイプの男性。

こういう男性は女性の扱いに慣れていて、その気にさせる術を心得ているに違いない。

だって彼は、こんな風に見つめると、すぐに気づいて見つめ返してくるのだから。

響也と目が合いそうになって、香乃は慌ててワイングラスに手を伸ばした。

「時間が経つとまた味わいが変わるのよ」——そう美咲に教えてもらったことを思い出す。

軽やかで飲みやすかったワインは、時間とともに深みを増して香乃の舌に小さく苦味を与えた。その苦味が過去のつらい恋を香乃に思い出させる。

彼はダメ。

……きつと昔と同じように痛い目を見る。

かつて、今夜の響也と同じように、香乃を見つめた人がいた。

目が合えば微笑んで、困っているとさりげなくフォローしてくれる。疲れているときには甘いものを差し入れて『特別だよ』と頭を撫でてくれた。

彼から向けられる好意に、自分は特別かもしれないと期待した。

『香乃みたいなタイプ、初めてなんだ』

『香乃と一緒に居たら落ち着く』

『香乃、俺が全部教えてあげるから』

甘い甘い特別な言葉に酔って、惹かれて、そして『痛い』思いをした。

恋は『痛い』。

ひどく抉られた心の傷は時間とともにふさがっても、痛みは記憶はまだ消えない。

(だから、そんな目で見ないで。捕らえようとしてないで)

誰かを好きになる勇氣はまだない——

さりげなく向けられる響也の視線から、香乃はできるだけ目を背けた。

「香乃、大丈夫？」

「うん」

もうそろそろお開きになりそうな雰囲気の中、香乃は千鶴と一緒にパウダールームに居た。

真鍮のドアノブに、意匠をこらしたこげ茶のドア、バラのモチーフの壁紙など、高級レストランらしくパウダールームも優雅な空間だ。仄かに花の香りさえする。

お化粧直しのスペースに設置されたソファに、香乃は脱力して腰掛けた。

「飲むペースが早かったけど、珍しく酔いでも回った？」

くらりとするのは、酔いのせいなのだろうか。

けれど香乃はアルコールに弱くない。外見のイメージから飲めないように見られがちだが、そこそこ飲むことができるしつづれた経験もない。

でも今日は酔っているような浮遊感がずつとついて回っている。

もしかしたら、この店の階段を踏み外しかけたときから、体はずっと浮いているのかもしれない。

「笹井さん……香乃に興味津々だね」

「どうして私なのか、全然わからないんだけど。むしろ千鶴ちゃんたちと仲良くしたいからって言

われたほうがよっぽどしつくりくる」

これまでモテたためしなんか無い。

だから初めて言い寄られたあのときは舞い上がってしまったのだ。

ジェットコースターのように、急激に高みに引き上げられて、広がる景色に感嘆の声を上げた。けれど急降下した先には見たくもない現実が待っていた。

もう二度と乗りたくないと思うほど。

「香乃はかわいいよ。確かに目立つほうじゃないけど、香乃の優しくて控えめな雰囲気とか、魅力的だと思うけど」

千鶴は口紅を取り出して、綺麗に塗り直した。彼女に似合いのローズピンクが艶やかに唇を彩る。お姉さんっぽいしっかりした雰囲気がふんわりと和らぐ。

たとえ友人の最良目だったとしてもそう言ってもらえるのは嬉しい。でも自分が男だったら、やっぱり美咲や千鶴みたいなタイプを選ぶだろう。

決して自分ではない。

「笹井さんは……すぐモテそうだよね」

「うん。むしろモテすぎて、選びたい放題に見えるね」

千鶴がボーチに口紅をしまいながらにっこり笑った。誰が見たって響也は女性に困るタイプじゃない。千鶴の言うとおり、モテすぎて困っていいそんな人だ。

「ああいうの、困る。どうしていいかわからない」

「そうね。あんな自分の魅力を理解していいような人に強引に来られたら拒めないね。でも、香乃にそう思わせた時点できつと笹井さんが勝っている」

姉のように慈しみのこもった千鶴の眼差しに、香乃はそれ以上の言い訳が浮かばなかった。

大学時代からずっと仲良くしてきた千鶴は、香乃の『痛い』恋も知っている。だからこそ彼女は、香乃の揺れる心を見抜いているのかもしれない。

香乃は両手で頬を包むとパチンと軽く叩いた。

こんな風に落ち着かないのは、酔っているせいだ。おいしいワインにも彼の視線にも酔わされて、体も気持ちもふわふわしているだけ。

酔いから醒めれば、夢からも覚める。

「千鶴ちゃん、行こう！」

何か言いたげな千鶴に先に声をかけて香乃はパウダールームを出た。

今日は平日だから、明日はみんな仕事だ。週末であればこのあと別のお店でも——という可能性もあったけれど、美咲が「さあ帰ろうね」と先手を打ったのですんなりお店を出られた。

彼女は事前にしつかりタクシーを呼んでいたらしく「私たちタクシーを予約しているので、来るのを待ちますね」と男性陣に帰宅を促す。

香乃の部屋は駅からそう遠くないので、この時間ならまだ電車を使って帰ることができる。

だが美咲は、タクシーで恋人の家に向かうついでに送ってあげる、と太っ腹なことを言っただけで、その遠慮を退けた。

先ほどの千鶴同様、美咲も香乃のことを心配してくれているのだろう。今夜は本当は、彼氏と別れた千鶴に新たな出会いを設ける場だったのに、かえって二人に気を遣わせてしまった。

「じゃあ、また」

と弘人が響也の肩を叩いて背を向ける。このまますんなりとお開きになりそうで、香乃は少しほっとした。

名刺をもらい彼の名前や連絡先を知った。

じっと見つめられて、親しげに名前を呼ばれた。

けれど、それだけだ。きつともう会うことはない。

「あ、来た」

美咲が予約したタクシーを見つけて咄く。香乃もつられてそちらを見たときだった。

「香乃ちゃん！」

響也が踵を返して走ってきた。ゆるんだネクタイが首元で乱暴に揺れる。

響也が香乃の前に立つのと、タクシーが横に滑り込んでくるのは同時だった。

「香乃ちゃん、連絡先を教えてください」

美咲がドアの開いたタクシーに向かって「すみません。少し待ってください」と告げた。千鶴は香乃の隣に立って、黙って展開を見守っている。

「俺の連絡先を教えてください……君から連絡が来るとは思えない。俺はたぶん、なんとかして君と連絡を取ろうと思う。それなら今ここで直接連絡先を聞いたほうがいいと思った」

ハザードランプを点滅させているタクシーも、少し離れたところにいる響也の同僚たちも、そして美咲や千鶴のことも気になって、香乃は咄嗟に何をどう答えればいいかわからなかった。

ただただ心臓がばくばく激しい音を立てている。

いや、本当は簡単なことだ。

連絡先を教えたくなければ「ごめんなさい。教えられません」とはっきり断ればいい。

そうすれば、彼がどんなにコンタクトを取ろうとしても、美咲や千鶴が香乃の連絡先を教えることはない。

言うべき言葉はわかっている。

なのに、なぜかその一言がなかなか出てこないのだ。

千鶴がそっと香乃の腕に触れた。はっとして隣を見ると「香乃が決めるんだよ」と言っているような視線と目が合う。

迷いつつ香乃は目の前の響也を見た。

彼は焦りと不安のまじった色を瞳にのせながらも、目をそらすことなく香乃を見つめている。そ

の一步も引かない強い眼差しには、彼の真剣さが感じられた。

そのせいで、香乃はますます混乱してしまう。

どうして彼ほどの人が、自分にこんな視線を向けてくるのかわからない。

興味、好奇心、気まぐれ？

彼にはそのどれも当てはまらない気がして、香乃の戸惑いは増すばかりだ。

心臓の音がうるさいほど鳴っている。

待っているタクシーも、千鶴と美咲や男性陣の視線も気持ちを集らせて、香乃は口をぱくぱくしながら言葉を探した。

迷うことなんかない。

断りの言葉を告げればいい。

不意に、千鶴が言った「笹井さんが勝っている」という言葉を思い出す。

その意味を今更ながらに香乃は自覚した。

響也は香乃を見つめたまま、じっと返事を待っている。

香乃はぎゅっと手を握りしめて、バッグからスマホを取り出した。そして、震える手で自分のメールアドレスを表示させる。

「メールアドレスでいいですか？」

そう言った瞬間、響也の表情がほっとゆるんだ。口元に浮かんだやわらかな笑みに、香乃はド

キツとしてしまう。

彼は自分のスマホにメールアドレスを入力すると、打ち間違いないか確認してから香乃を見た。

「ありがとう。必ず連絡する」

「……………」

あまりに恥ずかしくて顔を背けると、美咲と千鶴が面白そうに笑っている。少し離れたところでは、響也の友人たちが手を叩き合わせていた。

それを見た香乃は、ますます小さくなる。

羞恥しゆうちに縮こまっている香乃とは裏腹に、響也は落ち着いた声音で「お待ちせして申し訳ありません」と、美咲たちやタクシーの運転手に声をかけた。

さらに香乃たちが全員タクシーに乗り込むまでそこにいて、ずっと見送ってくれた。

タクシーがレストランから離れると、香乃はぎゅっと胸に片手をあてた。一向に治まらない心臓の音が、車内に聞こえてしまいそうだ。

「香乃……頑張ったね」

「何かあったらすぐに私たちに相談するんだよ」

二人はからかったりすることなく、香乃を励ます言葉を贈ってくれた。

これから何が始まるのか、どうなっていくのか香乃には想像もつかない。

響也に連絡先を教えてしまった自分の行動の意味さえもわかっていない。

香乃は、もう片方の手に掴んだままのスマホを——響也との繋がりを示すそれを——力強く握りしめた。

今から二年半前。

大学を卒業した香乃が就職したのは大手の製薬会社だった。海外企業と提携していたそこは英語力の高い人材を欲していて、香乃はその能力を見込まれて採用された。英会話よりも翻訳に長けていたので、書類処理をメインに行う業務についた。

そこで出会ったのが同じ課の先輩だった男性社員だ。五歳年上の彼は、留学経験があつたせいかわレディファーストが板についていて、香乃にいつも優しく接してくれた。

初めての社会人生活は、慣れないことばかりだった。様々な仕事を覚えて、先輩の女子社員との関係に気を遣い、自分の父親のような社員とも円滑に業務をこなさなければならぬ。毎日が精一杯で、緊張感に包まれている中で、彼の存在が香乃の支えだった。

いつも目立たぬように仕事のフォローをしてくれて、週末にはおしゃれなレストランに連れて行ってくれる。お酒の飲み方も彼に教えてもらった。

大学時代にも仲良くなった同級生の男子はいたけれど、女子高出身の香乃はおまごみたいなお付き合いしかしてこなかった。

だから初めてとも言える大人の男性との恋愛に、香乃はすぐにのぼせた。

恋愛に慣れていない香乃を手玉に取るのは、さぞや簡単だったことだろう。

彼が誰にでも優しく、特に初心そうな新入社員の子を狙って遊んでいると知つたのは別れたあとのことだ。彼には本命の恋人がいたし、香乃は体のいい浮気相手ではなかった。

これまでうまくやっていた彼のお遊びを、本命の彼女に知られたことが悲劇の始まりだった。

香乃との関係がバレたとき、彼は香乃にしつこくされて困っていたのだと嘘をついた。そして、同じような言い訳を、会社の人間にもしたのだ。

それによって香乃は、二股をかけられたかわいそうな浮気相手ではなく、恋人のいる男に手を出した女に仕立て上げられた。

『大人しそうな雰囲気です誘う』

『ストーカー一歩手前で、迷惑していた』

『断ると、泣いて取り乱したから、仕方がなかった』

彼は人当たりが良く、仕事もできる人だったから、当然周囲は新人の香乃よりも、彼の言葉を信じた。香乃の評判は一気に落ちて、ありとあらゆる悪口を社内にはらまかれた。

ただ好きになつただけ。

恋をしただけ。

それに夢中になつただけ。

けれど、初めて夢中になつた恋は『痛い』結末で終わった。

香乃は会社に行くのがつらくなって、結果的に逃げてしまった。

会社を辞めて、引越しをして、就職してからの人間関係を全てリセットした。

運よく今の会社に採用された当初、香乃は極力、他人と関わらないようにしようと思っていた。

誰とも関わらなければ、恋をすることもない。恋をしなければ傷つくこともない。

社員数も少なく、年配者の多い小さな会社は、若い男性との出会いなどなかった。傷ついた香乃にとって、新しい会社はとても望ましい環境だった。

だが、他人に深入りするつもりのない香乃にも、そこは思った以上に優しい場所だった。

肩肘張って強がって、淡々と仕事に取り組んでいた香乃を、慰めるでも諷めるでもなく、さりげなく声をかけて徐々に緊張をほぐしてくれた。

必要以上に他人と関わらず、週末も家に引きこもっていた香乃を引っ張り出してくれたのは、大
学時代の友人とこの会社の主婦たちだった。

新しい環境で出会った人たちのおかげで、ようやく気持ちが落ち着いてきたところなのだ。

そんな中、新しい恋をしようなんて気持ちにはまだなれない。

いつかまた誰かを好きになれたらいいとは思っても、今のところ積極的な出会いは求めていなかった。ワイン会だつて千鶴のためだと思つたから男性たちとの相席に同意したのであって、自分のためじゃない。

なのはどうして響也の申し出を断れなかったのか。

あの夜の自分の行動を思い出すと、香乃は居たたまれなくなる。そして酔っていたせいだと言いつつ訳したくなる。

ワインと彼の視線に酔っていたせい——

香乃はスマホの画面を見て、ため息をついた。

ワイン会以降、響也からはインスタントにメールが送られてくる。

『連絡先を教えてください』というお礼の言葉から始まって『時間ができたら食事でもどうかな』という自然なお誘い。

恋人も好きな相手もないのだから、食事の誘いぐらい受けるものなのかもしれない。

けれど、そうした誘いに深く考えずにのつたせいで、かつての香乃は『痛い』思いをした。

もうそんな思いはしたくない。

そんなことをぐるぐる考えているうちに返信が遅れ、結局必要最低限の短文を送ってしまう。

『今週の金曜日は空いていますか？』と届いたメールに、香乃は迷った末に『予定があります。すみません』と短い返事を送るのだった。

* * *

響也は香乃からの返信メールを見てふっと息を吐いた。向かい側で昼食を取っている裕貴が苦笑

いを浮かべている。

「今回も見込みなし？」

「こういう返信は早いね。迷いなくばっさりだ」

「こんなに手ごわいの初めてじゃないか？ 響也」

毒のなさそうな優しい風貌をしているのに、裕貴は平気で痛いところを突いてくる。

しかも、ワイン会での響也の様子からその後の悪戦苦闘具合まで、つぶさに観察されて、面白がられていた。

響也としては連絡先を交換すれば、もっと簡単に彼女との関係が始まるのだろうと思っていた。

メールで数回やりとりをして、互いの都合をつけてプライベートで会う。そうした時間を重ねていけば、関係なんて自然に始まるものだと思観視していた。

「脈なさそうなら、あきらめたら」

「……………」

日替わり定食のサバの塩焼きを食べながら、他人事ひとごとのように言った男を響也はじろりと睨にらむ。

「あの子の何を気に入ったのか知らないけれど、反応薄いんだろう？ 付き合っている男はいないって言っていたけど、好きな男がいるのかも」

その可能性は否定できない。

何気なくメールでいろいろ聞いているが、質問をなかつたことにされるか、当たり障りのない内

容で誤魔化されてしまう。

普段なら、裕貴の言うとおりに早々に脈なしと判断してあきらめていただろう。

響也はため息をついて、定食の豚汁を口にした。

外資系商社ながら和食のメニューに力を入れている社食は、味もボリュームもコスバもいい。

営業で外に出ることが多い響也は、社内にいるときは、必ずと言っていいほどここを利用している。

「よう」

明るい声とともに、トレイを手にした弘人が裕貴の隣に腰掛けてきた。三人で顔を合わせるのはいん会以来だ。

「出張だったのか？」

「ああ、中国まで」

裕貴の問いかけに弘人が頷く。そのまましばらく仕事の会話が広がっていった。

同期とはいえ部署はそれぞれ違うため、こういう機会に情報交換おしなを行う。響也もいつもならもっと積極的に会話に加わるのだが、今は仕事以上に難しい案件で頭がいっぱいだった。

「そういえば、おまえが気に入っていた香乃ちゃん、だっけ？ うまくいってる？」

いきなり話題を振られて、響也は咳ばらいをする。

その様子を見て「うまくいってない？」と聞いた弘人に、裕貴は神妙に頷いた。

うまくいっていないのは確かでも、他人に指摘されるのは面白くない。

「あー、やっぱりそうか」

弘人は一人納得したように頷いて、親子丼をかき込んでいる。いつもなら彼の豪快な食べっぷりは見ていて気持ちがいいけれど、今の響也は鼻についた。

「やっぱりって、どういう意味だ？」

響也はにっこりと冷笑を浮かべて弘人に答えるよう促す。

「あ、いや、ほら美咲ちゃんがさ、あのあと俺に釘を刺してきたんだ。あんまり響也のアプローチがわからずまだだったから、いい加減な気持ちで大事な友達に近づいてほしくない、って。俺も詳しくは聞き出せなかったけど、香乃ちゃん恋愛には消極的らしい」

「ふうん、なんか恋愛で嫌な目にでもあったのかな？」

裕貴が呟いた何気ない言葉に、響也は視線を伏せてスマホに目をやった。

なかなか関係が進展しない原因が、恋愛で嫌な目にあつたせいならば、自分のやっていることは彼女にとっては迷惑なことなのかもしれない。

薄々感じていたことを再認識させられて響也は逡巡する。

あのとき、タクシーを待たせて、さらには友人たちの足まで止めて、強引に連絡先を聞いた。

香乃のようなタイプだと、あの状況で申し出を断るのは難しかっただろう。

だからこそ、あえてああしたタイミングを狙ったのだけれど、もう少し別の手段を取ったほうが

良かっただろうか。けれどあのときは、それ以外の方法を思いつかなかった。

「なあ、響也は本気なんだろう？ だつてあんなおまえ初めて見たし」

親子丼の鶏肉を口に放り込んで、のんきそうに言っているけれど、あの夜、暴走しかける響也を何度となく止めてくれたのは弘人だ。

裕貴は逆にとことん傍観者に徹して、響也の様子を観察して楽しんでた。

そんな二人が今、響也の返事を待っている。

「いい加減な気持ちじゃない」

それだけははっきり言える。

でなければ、脈なしだとわかっていてなお、これほどまでにあがいたりしない。

弘人と裕貴は顔を見合わせると、弘人はやりと笑い、裕貴はやれやれといった反応をした。

弘人は食事の途中にもかかわらず、トレイにきちんと箸を揃えて置く。そして大きな背中をさらに伸ばすと、得意げな笑みを浮かべた。

「響也……おまえが本気ならいいことを教えてやる。だが、見返りはいたたく！」

弘人はやり手らしさを醸し出して、堂々と言い放った。その様子がなんともうざくて、本来なら無視するところだ。

響也は胡散臭げに弘人を見た。

彼の言う「いいこと」は当てにならないし「見返り」を求められるというのも憂鬱だ。

だが、なり振り構ってられないほど切羽詰まっている自覚もある。

何度メールを送っても、おそらく香乃は響也の誘いに応じたりはしないだろう。自分が彼女について知っているのは、メールアドレスと名前だけ。

どこに住んでいるのか、どんな仕事をしているのか、それさえも掴めていない。

「弘人……何か知っているなら教えろ」

弘人を頼るなんて面白くないと思いつつ、響也は藁にも縋る思いでそう口にした。

結局のところ、弘人から得た情報はかなり曖昧なものだった。けれど、他に手立てのない響也にとっては一筋の光明に違いない。それに、見返りを成功報酬にさせたので成果がなければ何もせずに済む。

休憩時間はまだ残っていたが、響也は二人を置いて一足先に社食を出た。急いで仕事を調整しなければならぬ。金曜日に定時に上がるための仕事の算段を即座にはじき出す。

時間がかかりそうな仕事は、頼りない気もするけれど後輩に振ろう。きつといい経験になるはずだ。頭の中でいろいろ計算をしていると女子社員に声をかけられる。

「笹井さん」

仕方なく響也はその場で足を止めた。

社食を出てエレベーターホールに向かうまでの間に、人目につきにくい場所がある。設計上のミ

スなのか、無駄にも思えるその空間は実のところ告白をするのにもってこいの場所になっていた。

いつもは面倒を避けるため、足早に通り過ぎるようにしていたのだが、あれこれ考え事をしていたせいで歩調がゆるんでいたようだ。

無駄な空間に意味を持たせようと置いたとしか思えないパキラの鉢を背にして、響也は腹をくくって目の前の女子社員と向き合った。

「この間はありがとうございます」

「いや、俺は特に何も」

そう答えながら記憶を手繰り寄せる。女子社員はご丁寧に、響也のおかげで助かったのだと経緯を説明してくれたので、なんとか思い出すことができた。

しかし、自分が手助けした仕事の内容は思い出せても、助けた相手までは覚えていない。

「お礼にお食事でもどうですか？」

響也は目の前の女子社員を改めてじっと見た。

肩までの真っ黒い髪は艶やかで、メイクにも派手さはない。けれど自分のかわいらしさを自覚して男好みに装っているのがわかる。

うつむいて照れた仕草でもすれば完璧だったのに、上目遣いで見つめてくるから裏が透ける。

女の子は嫌いじゃない。

駆け引きするあざとさもかわいいと思うし、こちらの気を引く手練手管にも努力を感じる。

正直、どんなタイプの女の子とも、そこそこうまく付き合っていける自信があった。

食事ぐらいなら構わないかと、以前なら彼女のアプローチにのったかもしれない。駆け引きを楽しんで、一緒に遊んで、一夜をともに過ごす。

でも今の響也には、それをしたい相手が他にいた。

響也はにっこり微笑むと、初対面も同然の女子社員の肩に触れた。そしてそっと彼女の耳元に顔を近づける。

彼女は戸惑ったようにピクリと震えた。

白くて細い項からはふわりといい香りが漂う。

「……ごめんね。仕事が忙しくて余裕がないんだ」

鼻腔をつく香りを吸い込んで、響也は甘ったるく彼女の耳元で囁いた。

そうして、すまなそうに首を傾けて優しく微笑む。

色気を漂わせてそうすれば、たいていの女の子たちは素直に引き下がっていく。

彼女も「そ、そうですか」と頬を真っ赤に染めながら頭を下げて踵を返した。

ふわりと彼女が残した香りが周囲に漂う。

「いい匂いなんだけどね……君じゃない」

響也は香乃を思い出す。階段で足を踏み外しかけた彼女を支えた瞬間、響也はかつてないほど自分が興奮しているのがわかった。

あの衝撃と衝動はそう忘れられるものではない。

初めてのあの感覚が偶然なのか、それとも彼女だからなのか確かめたい。

「香乃ちゃん……もう一度君に会いたい。会って俺は確かめたいんだ」

だから弘人が与えてくれた曖昧な情報にも縋りつく。

どんなチャンスでも逃すわけにはいかなかった。

* * *

終業を告げる『夕焼け小焼け』の音楽が余韻を残して流れ終わる。

数字ばかりが並んだデータを入力していたせいで腕が疲れた香乃は、最後にうーんっと伸びをした。

凝ってこりこりと音の鳴る肩に、今日のヨガ教室では存分に肩甲骨を動かそうと思う。

ヨガを始めたきつかけは、智子と朝美にヨガ教室に誘われたからだ。

転職からしばらくして、新しい仕事や人間関係に慣れてきた頃だった。今なら彼女たちが、ストイックに仕事をこなす香乃を心配して声をかけてくれたのだとわかる。

『運動不足にもストレス解消にもいいのよ』

『体験だけでもどう？』

そう言われて一緒に行ったのが始まりだった。

確かにパソコンにはかり向かっていると、背中や肩が強張こばってしまし、運動不足も気になってくる。彼女たちに勧められるままヨガ体験に参加した香乃は、体験後すぐに入会した。

キャンペーン中で入会金が無料でレッスン費がお得だったこと。ヨガマットも無料で貸し出してくれて、ウエア以外必要ないこと。会社帰りに行きやすく、駅から近いこと。いろんなプラス面があったのも理由のひとつだ。

岩盤浴がんぱんよくヨガというスタイルのその教室は、曜日や時間帯によって様々なレッスンが準備されている。初心者向けのリラククスを中心としたレッスンから、本格的に体を動かすレッスンまで。

暖かな空間の中、ゆったりとした音楽に合わせて、ヨガのポーズをとっていく。

呼吸を整え、自分の体と心に向き合う時間は、香乃の心に余裕を持たせてくれた。おかげで今はヨガを通して体と心を見つめ直し、ストレスの緩和かんわに役立っている。

「香乃ちゃん、今日はヨガへ行くの？」

「香乃ちゃんに尋ねられて香乃は頷いた。

「ええ、行きます」

ヨガウエアの入ったバッグをかかげて見せる。

「今日は私たちも行くつもりなの。一緒に行きましょう」

「珍しいですね、金曜日に行けるの」

彼女たちは、子どもが習い事で遅くなる日などに、レッスン予約を入れていることが多い。だから同じヨガ教室に通っていても、香乃とレッスン日が重なることはあまりなかった。

「ふふ、今夜は旦那が飲み会で、子どももおばあちゃん家なの」

「うちも出張中で、子どもたちは習い事の合宿なのよ。だからヨガのあとは食事に行こうって話してるの。香乃ちゃんも一緒にどう？」

「金曜日だからデートとかあるかしら」

「とんでもない。ぜひ一緒に過ごさせてください」

彼女たちは「やったね」と喜びながらも「あら、ここは喜んじやいけないんじゃない？」とか、「若い子と一緒になら、あのお店行ってみる？」など、相変わらずどんどん話が広がっていく。

彼女たちと親しくできるのは、香乃も嬉しかった。

これまではなかなか接することのなかった世代の彼女たちから、学ぶことは多い。

母親でも友人でもないからこそできる話もあるし、単純に彼女たちのおしゃべりは楽しかった。

香乃は久しぶりにうきうきした気分で、彼女たちと一緒にヨガ教室へ向かったのだった。

受けるレッスンによって先生が違うため、当然レッスン内容も異なる。

香乃がよく通う金曜十八時から始まるレッスンは「リラククスヨガ」というクラスだ。シッティングポーズ中心のプログラムで、ゆっくりと体をほぐしながら、途中で少しハードなチャレンジ

ポーズが入り、最後はまたゆったりと終わる流れになっている。

「吸ってー、吐いてー」

リズムを取りながらポーズを指示する先生の声が香乃は好きだった。女性にしては低めの色っぽい声は、外に向かっていた意識を自分の内側にスムーズに導いてくれる。

ヨガを続けることで、硬かった体も心なしかやわらかくなってきたし、きつい静止ポーズを維持することもできるようになってきた。

肩や背中をほぐし、体の隅々まで呼吸を行きわたらせる。普段動かさない筋肉がほぐれて、心地よい疲労感が体を包んだ。

最後はヨガマットの上で寝転がって呼吸を静かに整える。

いろんな思考を全て手放して、内にこもっていると眠気さえ覚える。

この時間が心を綺麗にリセットしてくれるのだ。

香乃はレッスンを終えると、軽くシャワーを浴びた。

本来なら岩盤浴がんばんよくヨガで出てきた汗は汚くないので、シャワーは浴びないほうがいいらしい。

このまま家に帰る場合はシャワーは浴びない。けれど今夜は一緒に食事に行くことになったためマナーとして汗を流した。

汗でしっとりとした肌も好きだが、こうしてシャワーを浴びればやはりすっきりする。

別のレッスンを受けていた智子たちは、すでに休息スペースでわいわいおしゃべりしていた。

「お待ちせしてすみません」

「大丈夫よ、ゆっくりで」

「そうよ、香乃ちゃん」

香乃が近寄っていくと、彼女たちから「このお店にしようと思うけどいい？」と言われた。好き嫌いのない香乃は笑顔で頷いて、彼女たちのあとについてヨガ教室を出た。

ビルの三階にあるヨガ教室にはエレベーターもあるけれど「これも運動よ」と言っけて智子たちはいつも階段を使っている。

「どっちが好きかわからない、なんて言ってみたかったかも」

「どっちも好きって言えば面白くなりそうよね」

「そんな気の多いヒロインはタブーよ、きつと」
階段を下りていると、話題はいつのまにか、彼女たちが今はまっている人気ドラマへと移っていた。

三角関係のオフィスラブのようで、ヒロインが二人のヒーローのどちらを選ぶのか、注目が集まっているらしい。

香乃はそのドラマを見ていないが、彼女たちの話を毎週聞かされているので内容は知っている。

「昨夜のドラマの話ですか？」

「そうなの！ 昨夜はどうとうねえ、ヒロインが二人の男から告白されちゃったのよ！」

なかなかドロドロの展開だなあと思う。

真意を見せず強引にアプローチしてくる男と、どこまでも支えて守ろうとする男。

どちらも魅力的な若手俳優が演じているせいで、女性誌には「どちらがいいか」みたいな特集記事が掲載されまくっている。

最後までヒロインの選ぶ相手が明かされないというのが、このドラマの見どころのひとつになっているようだ。

王道展開なら「どちらも選べない！」と言つて身を引く展開になるのだろうけど……

「キスすれば一発でどっちが好きかなんてわかるのにな」

智子がからつとした口調で言う。

「ああ、そうね。キスできるか、気持ちいいか、もつとしたいか、ではつきりするわね」
すると朝美も、智子の言葉にうんうんと同意する。

「……そうなんですか？」

香乃としては、二人の持論が少々乱暴に思えて思わず口をはさんでしまった。

「好き」かどうか「キス」すればわかる？

ハードルが低いのか高いのかよくわからない。

「ママ友が言っていたんだけどね。キスつてほら唾液が絡むでしょう？ その唾液にはね、相手の遺伝子情報があつて、人間つて自分の遺伝子配列とは似ていない人を求めるんだつて。ほら、生

き残つていくための生存本能だったかな。似た遺伝子よりは正反対の遺伝子のほうが、強いって言うか」

「なんか難しい内容ね」

智子の説明を、朝美は苦笑しながら聞いていた。

「だから……キスすれば、この遺伝子が欲しいかどうかわかるんだつて」

「じゃあ、私は旦那の遺伝子が欲しかったつてこと？」

「だから、好きな男とのキスは『甘い』らしいわよ」

得意げに智子が断言した。

「えー、甘かったかなあ、旦那とのキス」

何かを思い出しているのか、朝美の表情が少女のようにかわいらしくなる。

「たぶん甘かったのよ、ずっとキスしていたくなるくらい」

いつも元気な智子が、しみじみと言うものだから余計に真実味がある。

だんだん赤裸々な話題になつてきて、香乃はほんの少し離れながら話を聞いていた。

旦那さんや子どもの愚痴を言うこともあるけれど、彼女たちはいつも幸せそうに見える。恋人のいない香乃には、結婚、ましてや出産なんて想像もつかないけれど、その道を歩いてきた彼女たちの話にはどこか説得力があつた。

階段を下りきると、ヨガ教室の入っているビルを出た。駅に近いため、日は暮れても煌びやかな

明かりが灯り、行き交う人で溢れていた。

甘かっただろうか……彼とのキスは。

そんなことを感じる暇もなく、流されて、騙されて傷ついた。

誰かと甘いキスをする未来なんて、これから先自分にやってくるのだろうか。

そのとき、香乃の脳裏に一瞬ある男性の顔が過った。

「香乃ちゃん！」

直後、記憶と同じ甘い声が聞こえて香乃は思わず声のしたほうを振り返った。

どうしてここに？ とか、偶然なの？ とか考える前に、どくんつと心臓が鳴った。

「さ、笹井さん」

会社帰りだと思われる、スーツ姿の響也がそこにいた。

彼は早足で香乃に近づいてくると、目の前で立ち止まる。

「香乃ちゃん……会いたかった」

思わず口をついて出たというような吹きが、彼の心情を表していた。

どうしてこの人は、初対面同然の香乃に、こんなに甘い眼差しを向けてくるのか。

「会いたかった」と言葉どおりの気持ち、真っ直ぐにぶつけてくるのか。

彼が向けてくる強い感情に、香乃の気持ちは揺さぶられて言葉を見失ってしまう。

ただ彼を見つめ返すことしかできない。

「あら」

「まあ」

さらに距離を縮めようとした響也は、そこでずっと表情を改めて、香乃の後ろへ視線を向けた。

「突然お声掛けしてすみません。笹井響也と言います。香乃ちゃん……香乃さんと少しお話をしたいのですがよろしいですか？」

がらりと口調を変えた響也に、香乃はそれが後ろにいる彼女たちに言った言葉だと気づいた。

「私たち香乃ちゃんと職場が一緒なの」

「香乃ちゃんったら、やっぱりお約束があったの？」

「いえっ！ 違います」

「あら、じゃあもしかして香乃ちゃんのこと口説いている最中かしら？」

即座に否定した香乃に、朝美がさっと核心を突いてきた。

どうしてこんなに勘がいいのだろう。たったこれだけの接触で全てを見抜かれそうで焦る。

「はい、そうなんです」

響也は照れもせずに堂々と答えると、甘い眼差しを香乃に向けた。

そして意味深に微笑む。

イケメンのこんな笑みを見れば興奮しない女性はいない。案の定、智子と朝美は高い声を上げて香乃と響也を交互に見つめた。